

特集

「プライバシーフレンドリーシステム」特集号について

佐古 和恵^{†1} 福島 俊一^{†1}

^{†1} 日本電気 (株)

プライバシーが重要である、ということは誰しも否定することができない主張であろう。しかし、こうすれば必ずプライバシーを尊重したシステムになる、というような共通の解はない。システムによってはプライバシーを尊重しすぎると、不正行為が発見できなかつたり、効率性が失われたり、そもそも予定していた機能が提供できない状況になることもあるかもしれない。しかし、そこで「プライバシー保護は難しい」と思考停止してしまつてはもったいない。本特集では、具体的に、どのようにプライバシーに配慮したプラクティスがあるのかを紹介する。

プライバシーの定義には諸説ある。重要なことは、さまざまな関係者がいる中で、それぞれが他人に知られたくないと思っていることに踏み込んだり、過度に干渉したりすることなく、それぞれの意思を尊重するという事に尽きると思う。一見同じような行動でも、親切に見えたり、おせっかいにうつつたり、果ては状況によっては押しつけや強制に見えたりすることもあるであろう。

本特集はプライバシーを保護することのみが主眼ではなく、プライバシーに配慮したシステムを構築するための総合的なプラクティスを紹介したいと思った。プライバシー保護システムでもプライバシー尊重システムでもなく、プライバシーフレンドリーシステムというタイトルにしたのはそういう背景がある。

佐藤氏の論文「データプライバシー対策をグローバル対応するための顧客情報管理データベースの設計と運用のプラクティス—連絡先情報をプロモーション連絡に利用する事例—」は、お客様の希望を反映可能な顧客管理システムの設計方法を紹介している。会社として一貫してお客様とのコミュニケーションの結果を記号化し、統一的な対応を可能にするためのプラクティスである。個人情報への同意に限定されているが、国際的な法律の違いや、法律そのものが変わりうる中でのシステムの工夫という点で大変興味深い。

中村氏らによる論文「Privacy-Firstの実践に向けて

—PPM (Privacy Policy Manager) の開発と実証—」は、各サービスがどのパーソナルデータをどんな目的で利用するかについて、利用者に分かりやすく伝えるための工夫と、個人の意思を反映可能な同意の取り方が紹介されている。プライバシーポリシーに関する標準的な表現とその内容についての共通認識が育成されることにより、同意形成場面において利用者の不安軽減が期待される。

崎村氏の論文「プライバシーに配慮したパーソナルデータ連携実現に向けたプロトコルデザイン—OpenID Connect設計におけるプラクティス—」は、パーソナルデータを連携するための基盤として設計されたOpenID Connectを紹介している。このプロトコルがどういう思想で設計されたか、プライバシーを尊重する観点でどんな機能をどこまで仕様として取り組めたか、そして何をプロトコル外で担保しないとイケないか、が網羅的な国際基準をベースに解説されている。

橋田氏らによる論文「自律分散協調ヘルスケアを目指して—PLRに基づく介護支援システムの開発—」は、究極の個人情報コントロール権を実現するパーソナルライフログの概念の紹介と、実際にそれをヘルスケアに適用して実証したシステムを紹介している。新しい概念を実装する際の難しさとともに、入力しやすいインターフェースの肝要さ、また人間に分かりやすく機械も理解できるオントロジーの重要さが感じられる。

寺田氏らによる論文「モバイル空間統計の実用化に向けた取り組み」では、マルチステークホルダーとしてさまざまな有識者を巻き込んでシステムの妥当性を検証したモバイル空間統計の取り組みが紹介されている。このようなプロセスを経て、パーソナルデータを活用して社会に有用な情報を生み出すシステムを構築したことは関係者の参考になることが多いと思う。

最後に著者の有志の方と大学の先生をお招きして座談会をもうけさせていただいた。システム設計にとどまらず、社会の在り方、国家の在り方まで話がおよんだということは、このテーマがいかに人間社会の根本にかかわ

る事項であるかが分かる。それをICTという新しいツールで実現しようとする場合、今後もさまざまなプラクティスを蓄積し、紹介し、改善していかなくてはならない。そのまず第一歩の労をとってくださった著者および

座談会参加者の皆様に感謝するとともに、本誌に目を通していただいた皆様に次の一歩へのご支援を切にお願いする次第である。
